

まふ で KOSO!

過去の記事は
こちら

資格の先に広がる可能性

未来を予測する気象予報士

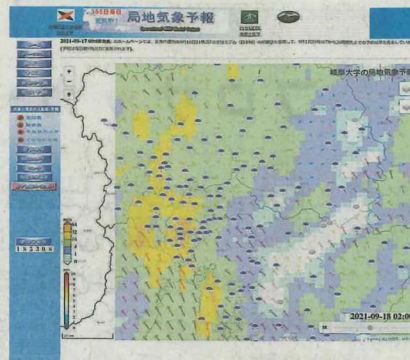
私が進路に悩んでいた高校生のころ、1994年に気象予報士という新しい国家資格が誕生しました。バブルが崩壊し、翌年には阪神大震災や、オウム真理教による地下鉄サリン事件が発生。先の見えない混沌とした時代だったからこそ、「未来を予測できる仕事」に強く引かれました。

気象予報士は天気図を読み解く専門家。医師がエックス線写真で体の様子を見るように、気象予報士は天気図から空の様子を把握し、未来の天気を予測します。私も、天気予報の基礎である気象学を学び、いつか気象予報士の資格を取り、その一員になりたいと願いました。

私は猛勉強の末、なんとか大学生のうちに念願の気象予報士試験に合格しました。しかし現実には甘くありませんでした。就職氷河期で、せっかくの資格を生かす機会を得られなかったのです。気象予報士は天気図を解析してはじめてその力を発揮できるのに、資格を取る前と何ら変わらない自分がそこにいました。資格はゴールではなく、挑戦のスタートにすぎないことに気付かされたのです。

大学に残り博士号を取得した後、私は岐阜大工学部の助手になり、コンピューターを使った

吉野教授が工学部の技術を活用して開発した天気予報サイト



気象シミュレーション技術を工学分野に応用する研究を始めていました。そのころ、自分が気象予報士であることを忘れかけていましたが、学部内の異分野の研究者や学生との出会いをきっかけに「自分の技術と、工学



吉野純さん

部の技術を組み合わせれば、新しい形の天気予報を提供できるかもしれない」と考えるようになりました。

仲間と挑戦を重ね、大学として予報業務許可を得て、独自の天気予報をインターネットで毎日発表できるようになったのです。研究者である自分が、大学で天気予報を行うことになるとは思いもしませんでした。資格が思いがけない形で生

岐阜大学気象データアナリスト養成プログラムに出席する参加者ら＝岐阜市で



じることがあるのだと感じました。

かつての私と同じような壁を感じている気象予報士は少なくはないはずです。国内に約1万2千人いるといわれる気象予報士のうち、実際に予報業務に携わっているのはわずか1割にすぎません。努力の末に得た資格が、生かされずに眠ってしまうのは本当にもったいないことで

す。

だからこそ、2023年に社会人向けのリスキング教育「気象データアナリスト養成プログラム」を立ち上げました。気象データとデータサイエンスの組み合わせにより、新規ビジネスの創出や地域課題の解決に貢献できる専門人材を養成する狙いです。次の一步に悩んでいる気象予報士が、資格の先にある未来へと歩み続けられる。そんな挑戦を、私は応援していきたいと思っています。

よしの・じゅん 工学部



年生まれ。

社会基盤工学科教授、専門は気象学。京都大学大学院修了。博士(理学)。気象予報士。1976